1　Necessary Twinkle

「ステラ、起きろってステラ」

その日の夕方。普段花騎士たちから団長と呼ばれている青年は、内勤から解放されてから早々に頭を抱えていた。

ベルガモットバレー王城の敷地の東の一角。そこには団長や花騎士たちが過ごす王家直属騎士団専用の宿舎がある。その団長の居室にあるベッドの上に、部下の花騎士であるステラが穏やかな寝息を立てていたのだ。

彼女の周りを見回す。小柄な彼女が体を預けているベッドの上と周りには、お菓子やら少女マンガやら様々な物たちが散らばっていた。この部屋に来るときに持ち込んできた彼女の私物だろう。

いつもきれいに片付けているはずの自室が無残にも彼女の色に染められていることにため息を吐いた後で、団長は優しくステラの体をグラグラと揺さぶる。

「もう遅いんだから、いい加減起きてくれよっ。スーテーラー」

華奢なそのシルエットに触れて揺らすたび、彼女の長くて細い薄青の髪から女の子特有の甘い香りが漂う。窓の外から夕陽の赤い光が差し込む中、男の目の前でそんな姿はひどく無防備だ。そんな姿に思わず顔へ手を当ててしまう。

「ふあぁ……ん、団長さん、おかえりなさい……もうお仕事、キラっと終わらせたんですか？」

他人の部屋でそのくつろぎっぷりができることにある意味感心しながら、団長は根気よく彼女の体を揺さぶり続けると、やっと眠り姫だったステラは目を覚ましてくれた。よかった、起きてくれて。

「ああ、ステラが寝ている間にね」

夢の世界から解放されたばかりのステラは、少しはだけた青い着物を直しつつ体を起こして団長の方へ向く。目を擦っている彼女の顔には未だまどろみが残っているようだ。

しかしこんなタダの子供にしか見えないステラも花騎士の一人であり、この世界の平和を守る立派な戦士だ。

そしてステラは、団長の誇る騎士団のホープである。

いつも自分の指揮に従って、人々の前に立って戦っている彼女の姿と、今のただの女の子らしい姿はまるで正反対だが、どちらもステラの一個人を示す要素に変わりはない。

そして、団長はどちらのステラの姿も好きだった。

「ゴメンな起こしちゃって。……けど、もう夕方だからそろそろ帰る支度をしてくれよ。朝から散々俺の部屋堪能できたんだから、もう十分だろ？」

「ええー……まだまだお外ピカピカーって明るいですし、いいじゃないですかっ」

わかりきってはいたがその返答に脱力する。団長が指すステラが堪能したものとはもちろんこの団長の部屋のことだった。

ベルガモットバレー女王シュウメイギクより、直々に王家直属騎士団長として任命された団長は、宿舎のなかでも特に上等な居室を貸し与えられている。国の誇る職人たちによって拵えられたこの家は、民衆たちが暮らす一般的な民家どころか、ベルガモットバレーの貴族たちが屋敷と比べても上等な造りであり、団長一人では使いきれないほどの広さを誇っていた。

そんな部屋を持て余しながら日常を過ごしているさなか、ある日ステラがここを訪れて以来、日が昇っているうちはこの家で過ごすことが多くなったのだ。

今日のようにステラだけが休みであれば、団長が王城勤務をしている間、留守番代わりに居着いていることも珍しくない。

「というか、とっくに約束の夕方だってのにまだ帰ってなかったんだな……別に家にいるのはいいよ。けどさ、物は散らかさないでくれって言ってるだろ？　ほら、こんなにして」

「うぐっ」

団長はベッドの周りに散らばっている呆れた気分になった原因の一つをつかんで差し出す。ステラが食べたであろうお菓子の包み紙だ。それらがあちこちに散乱し、ゴミ箱には入りきれないほど程たまっている。ステラが部屋に来たらほぼ必ず部屋が散らかるのは分かりきっていたが、だからといって怒らない訳にはいかない。

――まあ、俺の部屋がステラにとってそれだけ楽園だってことなんだよな……

ステラが初めてこの部屋に来たときのことを思い出す。

キッカケは、彼女の抱えていた悩み事だった。

幼くして世界花の加護を受けた彼女は、実家を出て花騎士となり、団長の部下に配属された。それは民衆にとってこの上ない誉(ほま)れではあるものの、戦う運命を否応(いやおう)なく背負わされることでもある残酷な現実だった。

そして、いつ出撃命令がかかるかもわからない騎士団所属の花騎士は、王城付近に建てられている宿舎の中で集団生活することを命じられる。

それは規則で決まっており、いついかなる時も団長の命令ですぐに戦場に赴(おもむ)くことができるようにするための、極めて合理的なルールだ。

しかし誰もが急変する生活に適応できるわけでもない。

幼いステラもその一人だ。騎士学校を出てすぐに自分の騎士団に配属したステラは、慣れない宿舎の集団生活と、強いホームシックに悩む苦痛の毎日が続いていた。

団長とステラがプライベートでも親しくなったのは、ある休みの日の朝にこの部屋を訪れてそれらの悩みを打ち明けて来た時だった。

涙ぐみながら次々と湧き上がってくる悩みと、せり上がった寂しさからくるストレスをひとしきり聞いて受け止めた後で、団長もまた普段の悩みや他愛のない会話をステラと日々交わした。そのうちに、上司と部下の関係を超えるほどに心の距離が縮まったのである。お互いの休みの日に、街に向かってデートに行くことも珍しくなかった。

それからというものの、時折ステラは団長の部屋に遊びに来る。もとより使い切れないくらい豪華で広い部屋なのだから、今日のように団長が勤務の間でも訪れてくるのは別に構わない。

しかし団長の中でも譲れないルールがあった。それは夜遅くまでステラを部屋に居座らせないことだった。

「明日任務だろ？　夜更かししてケガしてもいけないんだし、そろそろ帰ったほうがいいんじゃないか」

花騎士は体が資本であり、その主な任務は害虫と戦い続けることだ。世界花の加護があろうとその体にかかる心身的負担は大きく、不眠不休で戦い続けることができる訳でもない。ステラの団長として正論を口にする。

「うーん、もう少しボクの自由を伸ばしてくれてもいいと思います……最近ちゃんと任務も出来てますしっ」

しかし彼女は依然として団長のベッドの上で亀のように毛布を羽織りながら、顔だけだしてこちらへと上目遣いを向けてきた。

「……たしかにお前はよくやってくれてるよ。この前だってみんなと一緒に危険な害虫を斃してくれたし。けど、ここは一応よそのお部屋なんだぞ。『親しき仲にも礼儀あり』じゃないのか」

甘やかしてしまいたい思いが湧き上がるが、それでも踏みとどまって引き続き、ステラに反論する。

ステラに心から慕われていることは正直嬉しい。彼女がここを普段から訪れるのを許したのも、高い素養と素直な性格で世界に貢献し続けている彼女の頑張りを団長がしっかりと認めているからだ。

そしてステラと団長は少々歳の差はあるが恋人同士であった。それは騎士団の中でも周知の事実だ。

でなければこの部屋に入り浸る事を許しはしない。胸を張って他人に口にできる理由もなしに女を自室に侍らせれば、『団長の愛人』などと他の花騎士から蔑まれかねず、団長の威厳もまた崩れ落ちるからだ。

しかし、だからといってまだまだ幼いステラを夜遅くまで男の部屋に置いている訳にはいかない。

「手伝うからさ、散らかした分は一緒に片づけるぞ。後で俺が送って行ってあげるから。……しっかし、毎度毎度こんなに散らかしてるんじゃ、自分の部屋だってこんな風にしているんだろ。不便じゃないのか？」

ひとまず腰に手を当ててそう宣言したあと、未だベッドの上に座っているステラは団長の問いに返してきた。

「そんなことないです、団長さん。これがボクの最適化したお部屋のインテリアなんですっ。ホラ、こうやって、団長さんの広いベッドの上にいろいろおいたら……こうしてお菓子にも本

にも手が届きますし……こうやっていろんなものに囲まれていたほうがすっごく落ち着くんです」
「また同じ部屋の子に怒られても知らないぞ。ったく」
何故か得意げに言う苦しい反論をやんわりと一蹴して、ベッドから降ろそうと優しくステラの腕を引こうとする。
「いやですーっ、ボク、帰りたくありませんー！　片づけたらボク帰るしかないじゃないですかーっ」
「ステラが入り浸ってたら片付かないし、こんなだったら俺だってベッドで寝れないだろ。頼むから言うこと聞いてくれよっ」
ステラはなおもイヤイヤ言いながら首を横に振って出ようとしない。だが、これ以上話を長引かせるわけにもいかない。団長はしばし唸った後、ふと浮かんだアイデアを彼女に提案してみる。
「わかった、降参降参。……ちゃんと片付けたら後でご褒美あげるから。頼むよ」
「ご褒美……ほ、ほんとですか……!?」
「ああ、俺にできる範囲だったら。ご飯だって何でも奢るよ。ほーら、いい加減ベッドからでたでた。俺と一緒なら片付けてくれるよな」
「は、はいッ！　絶対絶対、忘れないでくださいね」

「ああ。男の誓いに訂正はない」

やっと折れてくれたのか、ステラはさっきと打って変わった様子であっさりベッドの座を明け渡す。そして嬉々として団長の言葉に従ってくれた。ステラは元々素直で働き者の女の子だ。

ご褒美で言う事聞いてくれるなんて、こういうところはやっぱり子供だよな――

彼女の扱い方は分かっているものの、それでも自分の言うことを聞いてくれたことに対して、団長は笑みを浮かべながら内心で感謝した。

「それにしてもさ、だいぶ寝てたっぽいな……服、グチャグチャじゃないか」

掃除の最中にステラを見ると、彼女の着ている着物がすっかりシワだらけだった。首元から覗く白いブラウスを覆うように、ステラの体を包み込むその特徴的な青い着物は、団長が以前、任務のご褒美としてステラに買ってあげたオーダーメイドの服だ。隣国たちの文化を取り入れた和洋折衷のデザインに加え、ステラの好む夜空の意匠を取り入れたそれはよっぽどのお気に入りらしく、買ってあげたその日からほぼ毎日のように身にまとっている。柔軟性と強度もあって戦衣装としても用いることのできる優れものだ。

そんな服がシワだらけになるということは、相当好き放題だらけきっていたのだ。

「……後でちゃんとアイロンかけておけよ。じゃ、手始めにベッドの周りからな」

「はいッ！」

そう切り出してからやっと掃除を始める。団長が持ってきたゴミ袋に次々とゴミを投げ込ん

でいる間、ステラもまた真剣に片付けを手伝ってくれていた。普段はぶーぶー言ってやる気を出さない彼女にしては珍しい。よほど『ご褒美』という言葉に惹かれたのだろう。

――ステラのお願いってなんだろ。高級レストランのデザートとか？　もしくは、また新しい洋服とか？　……ちょっとばかし財布が軽くなるのは覚悟しとこうかな……

あとで無理難題を突き付けられるかもしれない。その時はその時だ。できる限りのことをするという胸の気持ちに偽りはない。この前だって難敵をステラは騎士団のみんなと一緒に斃してくれた。前々からまた任務のご褒美として何か買ってあげようかなとは思っていたのだ。

「団長さん団長さん」

そんなことを考えている中、急にステラが団長を呼んだ。

「どうしたんだ？　って、マンガ？」

いったいどうしたのだろうと思いながら、ステラのほうに向きなおり、すぐに彼女の隣に移る。

「これ、読みませんか？　先週出たやつです」

そしてステラは胸元に抱くようにして持っていた分厚い本を団長に突き出してきた。

たしか、いつもステラが持ち込んでくるシリーズの少女マンガだ。女の子向けにしてはやけにシリアスな物語で、団長自身もたまに見ては引き込まれていた。ステラもそれがわかっているらしく、たびたび新しい本を買っては団長に勧めてくるのだ。

「へえ、新刊か。買ってきたの？」

「はい、ここに来る途中にお給金使って本屋さんで買ってきました。今日団長さんが帰ってきたら、一緒に読もうかなって持ってきたんです」

「どれどれ……」

ステラが差し出してきたそのマンガは戦記物に少女漫画らしい恋愛要素が織り込まれたシリアスな物語だった。『団長さんにも楽しめる本』と勧められて読んだ覚えがある。団長は前の巻の内容を思い出してみた。

たしか物語のクライマックスで、ヒロインが敵の凶刃によって命を落としたばかりだったか。その物語の主人公の少年とヒロインは、敵同士でありながらも奇妙な出会いから愛を育んでいく間柄だった。

そして再び敵として出会ってしまったときに、別の勢力に所属する一人の戦士が、主人公たちの事情を知らずにヒロインの命を奪ってしまい、主人公が復讐の炎を燃やしていたのだ。そこで前の巻はは締めくくられていた。

最新刊のページを開いてみると、ちょうど悲劇のシーンの真っ最中から始まった。敵に討たれたヒロインが死に、それを悲しむ主人公が泣きながらその骸を湖の中に沈めている。水葬だ。そして主人公は己の非力を嘆きながら、ヒロインの仇を討ち取ることを誓っていた。見ているシーンだけに心が沈む展開だった。

「ううっ……可哀そうですこの子……」

そしていつの間にかステラは団長の右腕にしがみつきながら一緒にマンガを読んでいた。その展開にすっかり感情移入したのか、大粒の涙を流して肩を震わせている。

「大丈夫か？」

さすがに見ていられないのでたまたま持っていたハンカチを渡すと、ステラは鼻をすすりながら大きな瞳にハンカチを押し当てていた。もともとステラは感受性の強い子だ。マンガを見て一喜一憂する姿は特別珍しいものでもない。こうやって団長の部屋で一緒になって過ごすことも、これまでに何度もあった。漫画を読むのにつかれて団長の隣で眠ってしまったこともある。その時は起きるまでしばらくベッドで寝かせていたが。

「はい……このシーン、すっごく切ないですよ。この女の子、やっと主人公と会えたっていうのに、殺されるなんて……」

かなりショッキングだったらしい。それまで少女マンガに人が死ぬようなハードな展開がないだろうと思っていた団長にとっても意外な展開だった。

さらにページをめくってみると、ヒロインを殺された怒りをむき出しにする主人公が、ヒロインの仇を討つために、殺してしまった張本人を追い詰めていく怒涛の展開が待っていた。

最終的に主人公は敵の腹部に剣を突き刺し、乾いた笑いをむき出しにして慟哭する。その場面でその巻は終わっていた。どうやら、まだ続きがあるようだが、これからも多分ステラにと

ってはトラウマ物の展開かもしれない……

「……って、そうじゃないだろ。マンガはおしまい」

泣き続けるステラに対し、どう声をかけて慰めてあげようかと迷い始めたところで、団長は本来の目的を思い出す。

「俺たちは掃除してたんだろ。こんな調子じゃいつまでたっても終わらないって。一緒になって読んだ俺にも責任はあるけどさ……」

結局その最新刊を二人で堪能した後に時計を見てみると一時間以上が経過しており、すっかり夜も更けてしまった。大方部屋の半分程度は片付いたが、あともう半分はステラが散らかした状態のままだ。

「うっ……それは……ごめんなさい」

このままじゃ完全に片付けが終わる頃には夜遅くになる。

そうなれば甘えたがりのステラのことだ。なんだかんだ理由をつけて一晩中居つきかねない。

『もうこんなに遅いんですし、朝までいっしょに過ごしましょうよ！　まだ読んでない本もいーっぱいありますからッ！』

『ボク、あんまりお外に出たくないし、団長さんと一緒にお城に行くまでいることにしますね』

『団長さんって、一人でこんなピカピカした広いおウチで、キラっとおウチで優雅に過ごしているんですよね。じゃーあ……団長さんの相棒のボクがここにいても、何も問題ありませんよ

ね』

これまでに聞いたステラの居座る言い訳を思い出してしまう。実際一緒に夜を過ごした時もあるのだが、彼女と長い時間過ごしていると落ち着かなくてしょうがない。まだ付き合いだして間もないのもある。

別に彼女を先に宿舎へ帰してもいいのだが、掃除をさせずにそれだとしつけにもならない。ご両親からステラを預かった身として、ある程度は厳しく接しなければ。親心にも似た気持ちでそう考える。

「……マンガも別にいいけど、たまには友達と外で遊んできたらどうなんだ？　今朝だって俺は仕事だったんだし。一人でいつまでも俺の家にいても飽きるだろ。それに、俺は女の子の遊びとかわかんないし……」

ステラはあまり同性、同世代の友達と付き合わない。

同じ騎士団の仲間とはそれなりにうまくいっているようだが、団長の知っている限りではステラのプライベートの付き合う相手は自分だけだった。友達がロクにいない、ということはないだろう。任務でいつもステラと仲良くしている花騎士に心当たりはある。だいたいステラより歳上の女の子たちばかりだが。

それを差し置いて自分にべったりなのはちょっとだけ心配だった。

「い、いいんですっ。ボク、団長さんの家にいるときのほうが何よりも幸せで……自分の部屋

よりよっぽどくつろげますから。というか……ホントは、ずっと帰りたくないです……団長さんが疲れて帰ってくるとき、新妻さんみたいに、ねぎらってあげたいって思うときもありますし……」

「ステラ……」

夢のような言葉に心がじんと熱くなる。恥ずかしそうに顔を赤らめてそんな事を言うステラに、『帰れ』と繰り返してばかりだった自分がいかに冷たい態度であったかを痛感してしまう。決して自分がだらけたいだけでこの家にいたわけではなかったのだ。

「ありがと……そう言ってくれると俺だって、ステラの団長で……恋人になれてよかったよ」

本心からそう言ったあとで、ステラを胸の中に抱き寄せる。

温かい。

まるでステラが持つ優しい心が熱になったかのようだった。

「わわっ、団長さんっ。そんな、いきなり……ん……！」

さらりとした髪を手ぐしで何度も梳いてあげたあとで、その小さな頭を撫でる。すれ違った彼女の頭から気持ちよさそうな吐息が耳元に触れた。触れ合うぷにぷにですべすべの肌が心地いい。

「けどさ……俺の部屋にいつまでもいるのは……まだダメだよ」

「……どうしてです？　ボク、団長さんが困ることはしたくないですけど……やっぱり、ピ

カピカなお部屋をボクが汚くしちゃうからですか？」
「まあ、それはステラと一緒に片づければ済むけど……ほら、男は夜になったら狼だって言うだろ。俺だって……ステラがすぐそばにいたら落ち着かなくなるときだってある。……そしたら我慢できなくなって、痛いことするかもしれない。あの時のように」
団長は以前、部屋を訪れてきたステラと一度体を重ねた。
恋人同士になってすぐの時だった。
そのときのセックスの際にステラは団長との行為の間、ずっと痛がっていたのだ。
元々小柄であり、処女のステラにとって団長の性器を受け入れたときの破瓜の痛みは、これまで受けたどんな痛みよりも辛かったらしい。
団長が何よりも見たくないのはステラの涙だ。自分の膨れ上がった欲望のために辛い思いをさせたことを、今でも団長は悔やんでいた。
だから恋人の間柄であるのにもかかわらず、二人でもう一度夜を過ごすことを自ら遠ざけてしまっていた。
「……ボク、あの時のことなんて気にしてません。初めては痛いものだってママから教わりましたし……ねえ、団長さん。もう一度ボクと一緒にえっち、してみませんか」
「でも……二回目でも、まだまだ痛いと思う。ステラにひどいことでもしちゃったら、それこそ俺、ご両親さんに申し訳が……」

「だったら痛くないようにボクのこと、愛しちゃってください。ボク、団長さんはひどいことしないって信じてます。それに……団長さんがもしボクにひどいことをしてしまうオオカミだったとしても、きっとボクなら大丈夫です。だってボクは団長さん自慢の、すっごく強い花騎士なんですから……」

薄い胸を張り、腰に手を当てつつ自信を持ってステラは答える。

「もういちど、ください。団長さん……ボクにとって最高のご褒美は、団長さんと愛し合うことそのものなんです。だからボク、この家で帰りを待ってたんですから」

団長の手を握りながら、ステラは正面からそうささやいてくる。ステラはもともと、歳の割に強い意志を秘めている。時には強情に言い返してくるときさえあった。こうなった時の彼女は意地でも折れてくれはしない。

「……分かった」

「はい……っ！　キス、しましょう……。ん……」

団長がうなずいてそう伝えると、花咲くようにステラは笑った。そして両手をステラの両手で握られた後で口付けをせがんできた。その様子に愛らしくなり、団長はその想いを受け止める。ちょっとだけががんでステラの背丈に合わせた後で、顔を近づけた。ぷるぷるしたくちびるにちゅ、っと静かに触れたあとで背中に腕を回す。

「ふぁ……っ……団長さんのくちびる、温かいです……！」

「ステラの方が俺よりあったかいって」
「そんな事ありません、ボクより、団長さんのほうが……ぁん……」
さらに何か言おうとしたところで団長はイタズラ心からステラのむき出しとなっている肩を指でなぞる。ステラの服は露出が多いのだ。肩、背中、脇。健康的な柔肌のいたる所に指を滑らせていくと、徐々に自分の中でステラを欲しがる想いが強くなっていくことを自覚する。心臓が高鳴り、男の本能に火がつき始める。
思ったより我慢はできないかもしれない。ステラに触れる手の力が、もっと強くなった。
「だ、団長さんっ……手付きが、やらしいです……！　ベッドの中に行きましょう……！　えいっ」
「うわっ！」
そしてキスをしている間、急にステラがそう言いながらむくれた後で、団長の体をベッドへと強く引っ張ってきた。不意を突かれてしまい、為す術なく彼女の体の上に倒れ込んでしまう。
「あ……団長さん……」
「……っ」
気づけば団長は、ステラに覆いかぶさるような体勢となっていた。まるで団長の方から押し倒したかのように。こうなった原因を作った張本人が、不思議そうにつぶやく。
「……」

ゴクり、と団長は目と鼻の先にある可憐な顔に唾を飲み込む。彼女の言葉が耳元で聞こえてきて、彼女の小さい体にある温もりが全身に伝わってくる。

目の前にある夜空のように深い瞳に見つめられる中、髪や肌から漂ってくる甘い香りにくらくらし、ひどく落ち着かなくなってきた。

「団長さん」

何十秒、無言でそんな状態でいただろうか。ステラの照れくさそうな声が聞こえた。

「……どうしたの」

「今夜は、いーっぱいえっちしましょうきっとここ最近、ずーっとお仕事でいろいろ溜まっちゃってますよね……そういうの全部ボクにぶつけてください」

「ああ。……もし途中で泣いても、止めない」

ステラの言っていることは事実だ。今朝だってステラのほうが休みでも団長は執務に追われていた。特にここ最近はたまたまステラと関わらない任務や行軍をしていたこともあって、こうして一緒に居られる時間が少なくなっていた。

ステラと一緒にいたい本音があるのは事実だ。見抜かれたところで否定もしない。そして明日からまた、お互いに団長として、花騎士として時間に追われる日々が始まる。また戦場で過酷な試練に身を費やさなければならないのだ。

それらを考えるとステラの強情さに納得がいく。

「全力だっていいです。痛いくらい本気で、ボクのこと抱きしめて――愛してください。……ほら、こっちの団長さんもムクムクーって……すっごくその気みたいですよ」

「――っ」

声にならない声が漏れてしまった。ステラが団長のズボンに手を伸ばしていたのだ。

ステラと密着したことで、隠しきれない男の本能が怒張を示している。生理現象、と言ってしまうのは簡単だが、『団長の本心を表している』と言うステラの言葉は。案外的を射ているかもしれないと思った。

「えっへへ、お手手でいい子いい子しちゃいますね。この子だって、触ってほしそうです」

「ば、バカ。ステラっ……やめ……」

ステラは楽しそうにぷにぷにした小さい右手で、ズボン越しに団長の半身に触れる。そして勝ち誇ったような様子でステラは何度も指で表面をなぞった。気恥ずかしさと意表を突かれたことで心臓が跳ね上がり、喉の奥から快感が喘ぎとなって漏れてしまう。とてもステラ以外の前では出せない声だ。

「この、すっごく大きい団長さんのが、この前ボクに痛いことしちゃった悪い子なんですよね……今度はボク、前みたいに泣いてばかりにならないようにしませんから……団長さん、ボクにこの子、ください」

最後のその言葉を聞いた瞬間、団長の中で何かが壊れる音がした。